

保育者養成校の学生の傾向・課題から検討する 実習指導の在り方について

— A 保育者養成校における保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲの実習先評価の経年比較から —

八 田 清 果・奥 恵・浅 香 勉・音 田 忠 男

A study on the trends and issues of students in nursery school training schools about the ideal way of the practical training guidance

— A Nursery Practice II and Nursery Practice III at a Nursery Teacher Training School
from the comparison of the years of the training destination evaluation —

HATTA Sayaka, OKU Megumi, ASAKA Tsutomu, ONDA Tadao

キーワード：保育者養成、実習指導、実習先評価

はじめに

本研究の調査対象である A 保育者養成校だけではなく、近年多くの保育者養成校で学生の学修意欲や基礎学力の低下が課題に挙がっている。

A 保育者養成校では、学生一人ひとりの課題を受け止め、一人ひとりが主体的に学び、経験を通じて意欲や自信を高めることができるような授業や実習指導、ボランティア活動等の体制づくりの必要性を教職員が研修等を通じて共通認識している。学生が経験を通じて、喜びとやりがいを実感し、保育者となる意欲を高めていくことは、保育者不足の解消にもつながると考えられる。つまり、学生の意欲の向上は保育者養成の重要な課題であり、その方法の検討と効果の検証が早急に求められているのである。

これまで A 保育者養成校では、一人ひとりが主体的に学び、経験を通じて意欲や自信を高めることができるよう、すでに様々な工夫が行われている。例えば、保育実習指導においても学生が主体的に学ぶことができるアクティブ・ラーニングの形式を取り入れている。具体的には、指導案や保育技能の製作と発表、グループワークを通じた施

設理解と考察等である。また、2019 年度からは実習やボランティア活動での学びを学年間で共有する報告会や学園祭プログラムの開催、現場で働く先輩や園長による講演、助言の機会の設定も始めている。

こうした取り組みにおいて、意欲が高く積極的な学生は、授業や報告会等での発表やボランティア活動等多くの経験を積んでいる。しかしながら、意欲が低く消極的な学生は、そうした経験も不足し、自信を持つ機会がさらに少なくなるという悪循環を生んでいるのではないかと考えられる。

さらに実習においては、指導や助言を失敗経験と否定的に捉えて自信を失う学生も近年多いように思う。A 保育者養成校では、授業内での振り返りや発表だけでなく、訪問担当教員が実習事後面談で個別に振り返りを行う際に、実習先の評価を踏まえた助言や励ましを行い、自己課題の明確化や課題を肯定的に捉えることができるように学生に関わることを心掛けている。

このように学内で、様々な取り組みを行いながら保育者養成を行っているが、それがどう評価に結びついているのかを実習先評価の項目から見ていきたい。

1. 研究の目的

A 保育者養成校の学生を対象に 2018 年度と 2019 年度の保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲの実習先の評価を分析し、A 保育者養成校での最後の実習を終えた 2 年生の学生の傾向・課題を明らかにしたうえで、実習指導の課題や方法について検討していくものである。

2. 研究の方法

2018 年度の保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの実習先評価は、奥・浅香・八田・音田 (2020)¹⁾において、分析した結果を用いた。本研究では、2019 年度の保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの実習評価を分析し、その傾向を 2018 年度と比較することで、継続的な実習指導の課題を明らかにしていく。

3. 研究倫理への配慮

学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、調査・研究については、個人情報保護するとともに、情報漏洩の防止に十分に配慮し、個人及び園・施設が特定されることのないように配慮した。また、学校法人小池学園研究倫理公正委員会の倫理審査の承認を受けた。

4. 実習先評価から見る学生の傾向

2018 年度と 2019 年度の保育実習Ⅱ・Ⅲの配属は以下の表の通りである (表 1)。実習に行った学生全体の人数に対する保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの割合を見ると、2018 年度と 2019 年度ほぼ半数ずつではあるが、2018 年度は保育実習Ⅲを選択した学生が若干多く、2019 年度は保育実習Ⅱを選択した学生が若干多かったことがわかる。

表 1 : 2018 年度、2019 年度の保育実習Ⅱ・Ⅲの配属数

		2018 年度	2019 年度
保育実習Ⅱ	実習生人数	33 人 (49.3%)	33 人 (55.0%)
	実習先園数	26 園	29 園
保育実習Ⅲ	実習生人数	34 人 (50.7%)	27 人 (45.0%)
	実習先施設数	24 施設	22 施設

なお、本分析で用いた実習評価表は A (非常に優れている)、B (優れている)、C (適切である)、D (努力を要する)、E (成果が認められない) の 5 段階で評価がつけられている。今回分析にあたっては、評価を A = 5、B = 4、C = 3、D = 2、E = 1、辞退等 = 0 と置き換え算出した。

(1) 保育実習Ⅱの実習先評価から見る学生の傾向 (2018 年度、2019 年度の比較)

① 2018 年・2019 年の配属の傾向

保育実習Ⅱの配属は、2018 年度、2019 年度ともにほぼ保育所であり、認定こども園への配属は、2018 年度は 1 園、2019 年度の配属は 2 園だけであった。また小規模保育所への配属は、2018 年度、2019 年度ともに 1 ヶ所であった (表 2 参照)。

② 実習先評価から見える傾向

保育実習Ⅱでは、配属施設の種別は保育所、認定こども園、小規模保育園の 3 種別であるが 2018 年度、2019 年度とも認定こども園、小規模保育所ともに配属数が少ないため、今回は配属種別での検討ではなく、保育実習Ⅱ全体としての実習先評価の傾向をみることにする (図 1、2、3 参照)。

表 2 : 保育実習Ⅱの配属施設種別の比較

種別	2018 年度		2019 年度	
	実習先施設数	実習生人数	実習先施設数	実習生人数
保育所	24 (92.3%)	31 (93.9%)	26 (89.6%)	30 (91.0%)
認定こども園	1 (3.9%)	1 (3.1%)	2 (6.9%)	2 (6.0%)
小規模保育園	1 (3.9%)	1 (3.1%)	1 (3.5%)	1 (3.0%)
合計	26	33	29	33

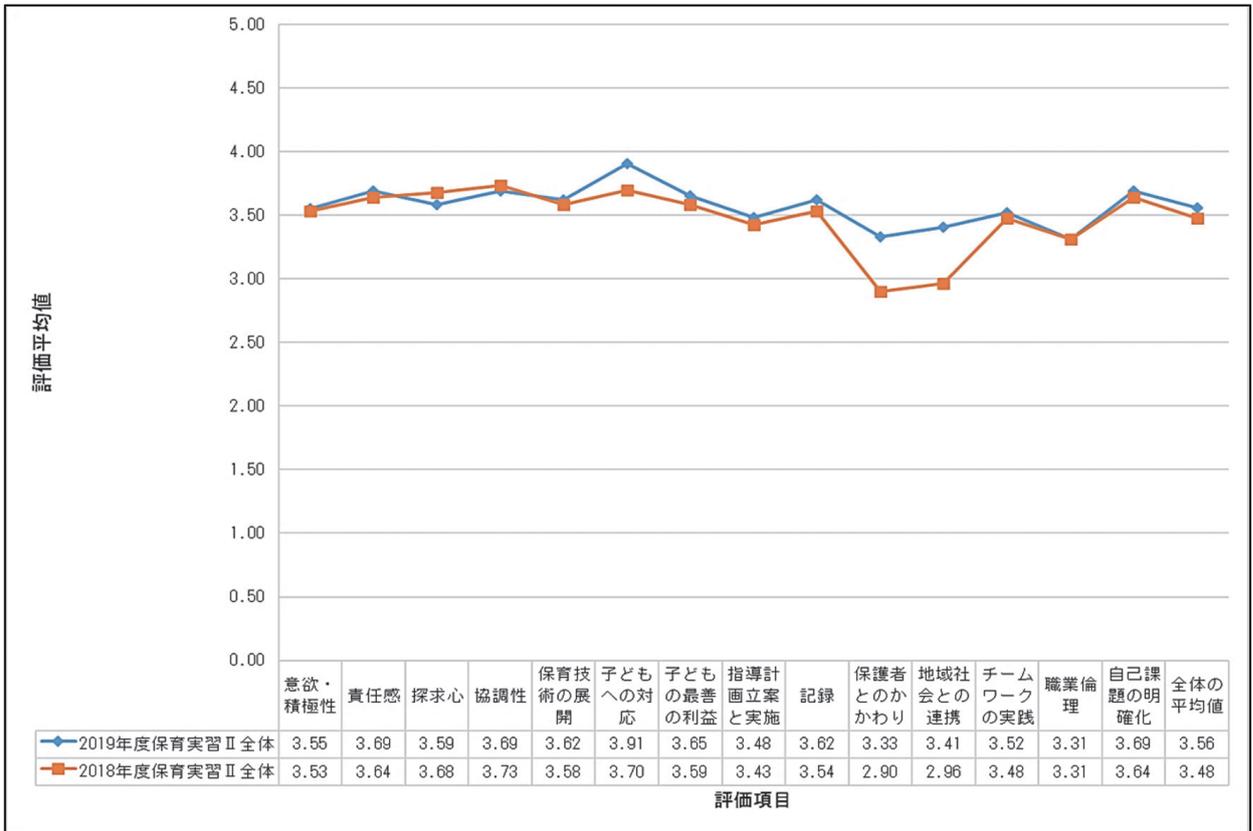


図1：保育実習Ⅱ全体の項目別年度比較（評価平均値）

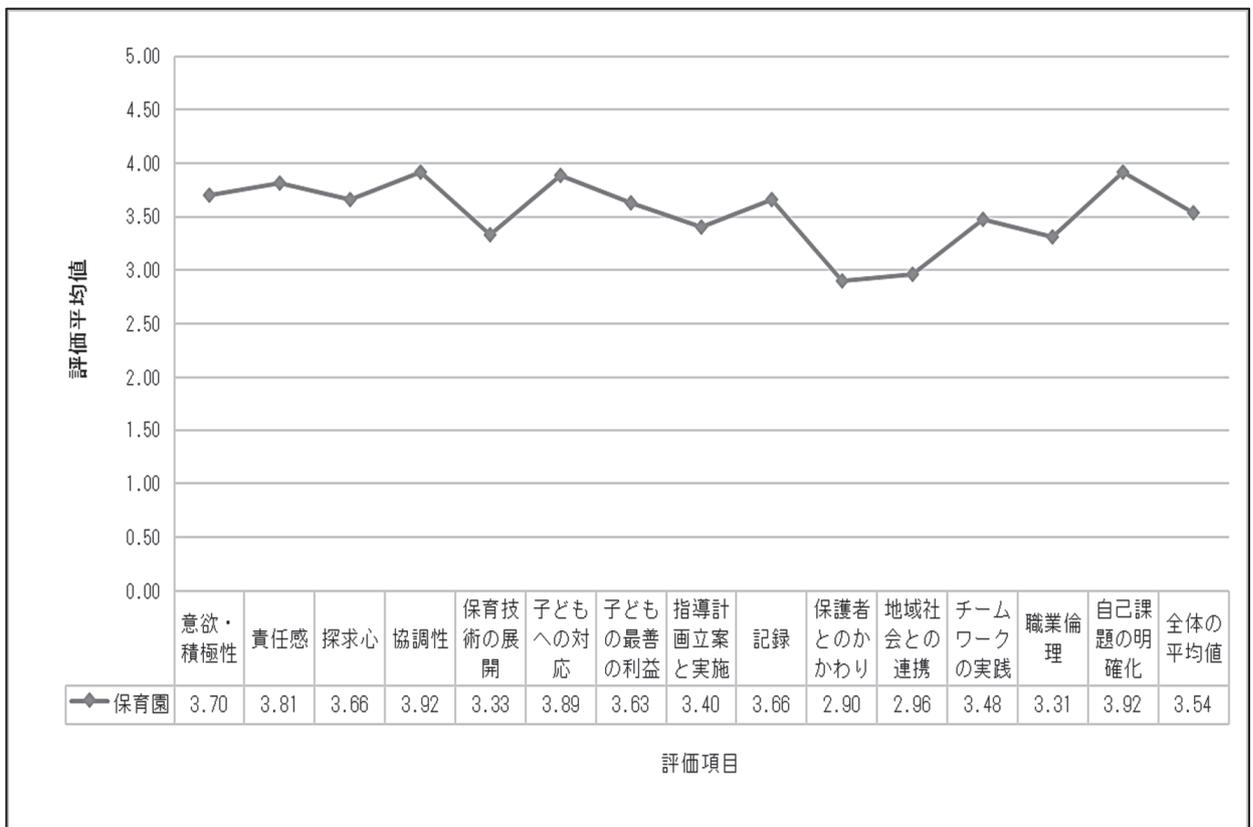


図2：2018年度保育実習Ⅱ 項目別平均値

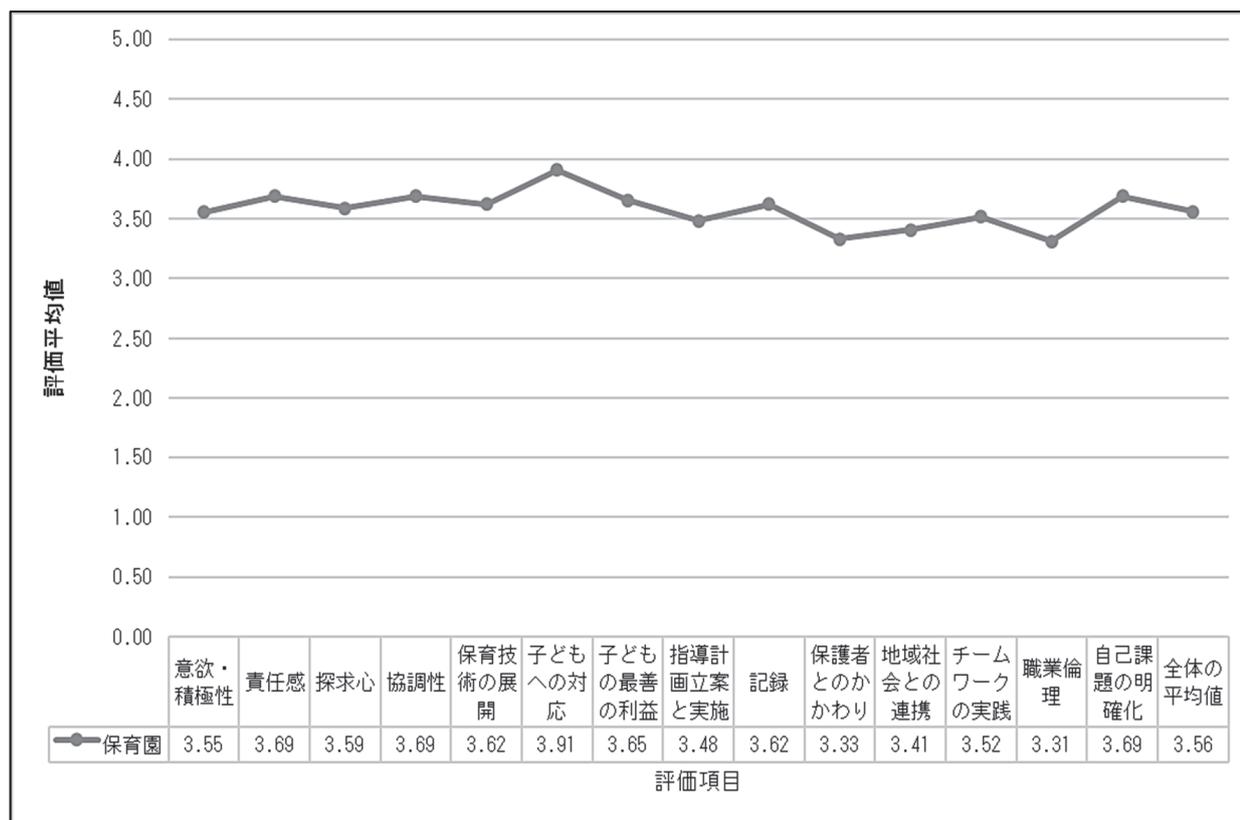


図3：2019年度保育実習Ⅱ 項目別平均値

保育実習Ⅱ全体の評価をみると、2019年度は2018年度に比べ、全体的に高い評価となった。2018年度の方が2019年度よりも高い項目は、「探求心」と「協調性」の2つであった。その2項目以外は全て2019年度の方が高い評価となった。また、2018年度は2.0台の項目が2項目あったことに対し、2019年度は2.0台の項目は一つもなかった。総じて2019年度の評価は2018年度の評価よりも若干ではあるが改善されていることが分かった。

項目別で見ると、2019年度と2018年度を比べた場合、大きく改善されている項目が「子どもへの対応」、「保護者への対応」、「地域社会との連携」である。

「子どもへの対応」に関しては、2018年度は項目全体で見ると2番目に高い評価であったが、2019年度は更にその評価を上回る結果となった(項目全体で見ると1番目に高い)。

「保護者とのかわり」については、2018年度の評価では、2.90と項目全体で見ると最も低かった。2019年度の評価では3.33と2018年度と比べ

約0.4ポイント上昇していることが分かる。「保護者とのかわり」に関しては、保育上、保護者への連絡や報告について、保育者が責任をもって行っているため(又は守秘義務の観点から)実習生が保護者と接することや対応をする場面はほとんどない。また、園によっては、その項目自体に評価をしない場合もある。そのため、良い評価に結びつきにくいと考えられる。ただ、2019年度は実習指導の授業内で、保護者との関わりについて、直接的な関与以外にも保護者と保育者が繋がるツールの一つとしては、連絡帳やクラスだより、園だより等があり、そういった手紙等を実習の際には見せてもらう様、意識し実習に臨むことを話した。そういったことも評価の改善の一因になっているかもしれない。

「地域社会との連携」は、「保護者とのかわり」同様、2018年度の評価では、2.96とこちらも2.0台であり、項目全体で見ると2番目に低い数字であった。2019年度の評価では3.41と2018年度に比べ0.45ポイントの上昇がみられた。こ

の項目に関しても保育実習指導の授業の中で、園内で行われている子育て支援の在り方についての視点をもって実習に臨む等具体的な指導を行ったことによる影響の可能性も考えられる。

2018年度は、すべての評価項目を数値化し、その結果に基づいて保育実習指導の進め方を担当者間で話し合い、2019年度の授業内で活かした経緯があった。今回の年度比較では、全てその成果の表れとは言えないが、今回の結果を受けPDCAサイクルに則った指導を行う意義があると考えられる。

(2) 保育実習Ⅲの実習先評価から見る学生の傾向 (2018年度、2019年度の比較)

① 2018年・2019年の配属の傾向

配属施設種別の割合に大きな違いがある。大きな差になっているのは、障害児系施設と障害者（通所）系施設である。2019年度は、障害児系の施設が多くなった結果配属学生も多くなり、割合が高くなった。逆に、障害者（通所）系施設は施設数も減り、配属学生も半数以下に減っている（表3参照）。こうした配属種別の違いも踏まえうえて、実習先評価からの学生傾向を見ていきたい。

なお、本研究において、施設種別については、以下のように分類した。

- ①養護系：養護施設・乳児院
- ②障害児系：児童発達支援センター、医療型障害児入所施設
- ③障害者（通所）：就労継続B型、障害福祉サービス事業所
- ④障害者（入所）：障害者支援施設

②実習先評価から見える傾向

2018年度、2019年度共に総合評価では、障害

者（通所）系施設が最も低い（図4、5参照）。これは配属にあたり、生活面・学力面等で課題を抱える学生を障害者（通所）系施設に配属するケースが多いことも影響していると考えられる。障害者（通所）系施設は「やさしい」「甘い」と思われがちであるが、これを見ると評価そのものは決して優しいわけではなく、評価項目別にみても他の実習先種別と比べても評価を低くつけており、厳しいものがあることがわかる。また、2019年度の方が、保育実習Ⅲ全体の評価を見ても、全ての項目で2018年度より平均値が高く、2019年度は2.0台の評価がない。

図6は、種別ごとの項目別評価平均値の年度比較である。これらの図を見ていくと、養護系は2018年度の方が平均値が高く、それ以外の障害児・障害者（通所）・障害者（入所）は2019年度の方が平均値が高くなっており、異なる傾向がみられた。さらに、評価項目ごとに見ていくと、2018年度は養護系、障害児系、障害者（入所）系施設で「利用者とのかかわり」が最も高い平均値を示していたが、2019年度では、「利用者とのかかわり」も高い平均値を示しているものの、どの種別でも最も高い平均値のついた項目ではなかった。2019年度は、2018年度に比べ障害児の施設、特に児童発達支援施設への配属が多かったのだが、そうした配属施設種別数の違いも結果に影響を与えたかもしれない。「協調性」「利用者ニーズ理解」「チーム枠理解」の項目においては、2019年度は最も高い平均値であった種別と、最も低い平均値であった種別が混じった。「施設理解」「家庭・地域社会との連携」は、2018年度に比べ2019年度の方が、平均値がどの種別でも

表3：保育実習Ⅲの配属施設種別の比較

種別	2018年度		2019年度	
	実習先施設数	実習生人数	実習先施設数	実習生人数
養護系	6 (25.0%)	10 (29.4%)	4 (18.2%)	6 (22.2%)
障害児系	5 (20.8%)	6 (17.6%)	7 (31.8%)	7 (25.9%)
障害者（通所）系	5 (20.8%)	7 (20.6%)	2 (9.1%)	3 (11.1%)
障害者（入所）系	8 (33.3%)	11 (32.4%)	9 (40.9%)	11 (40.7%)
合計	24	34	22	27

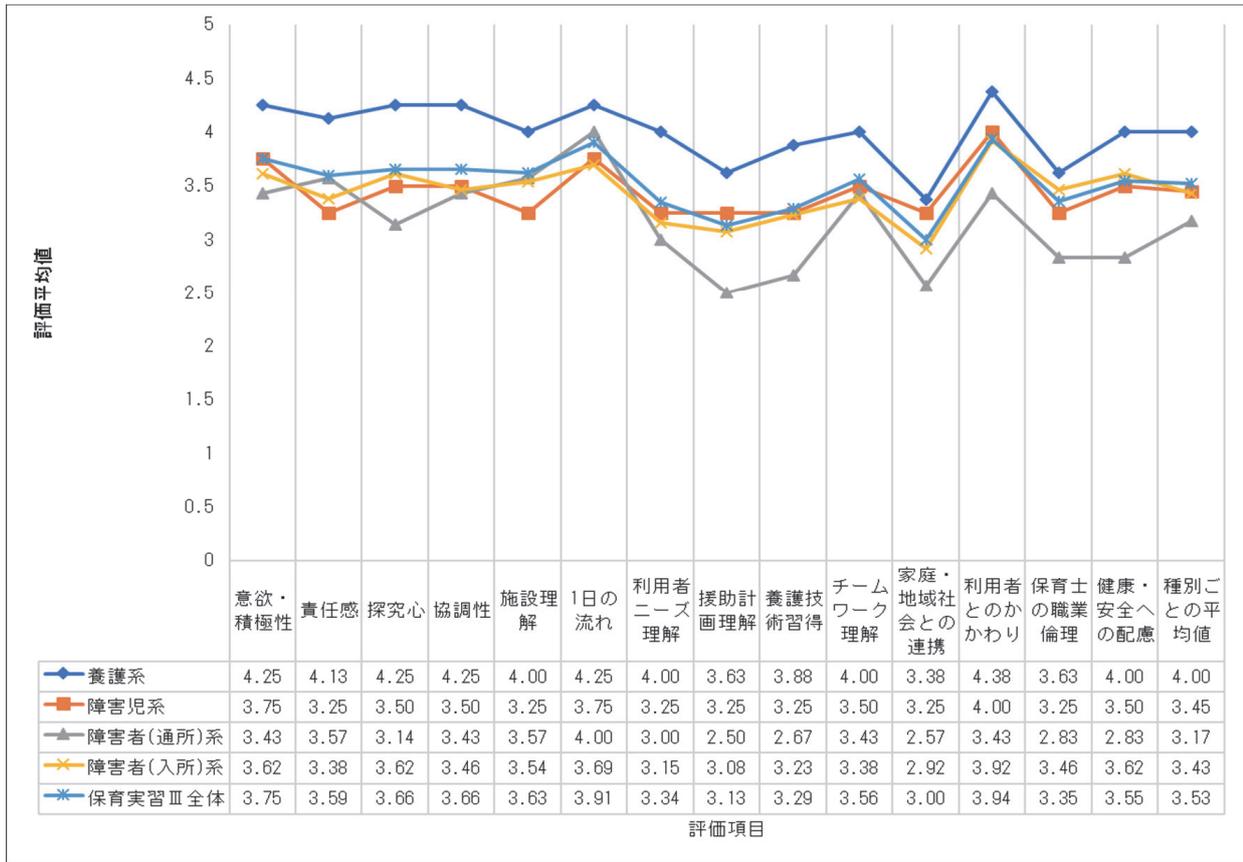


図4：単独年度内の実習先種別ごとの項目別評価平均値の比較（2018年度）

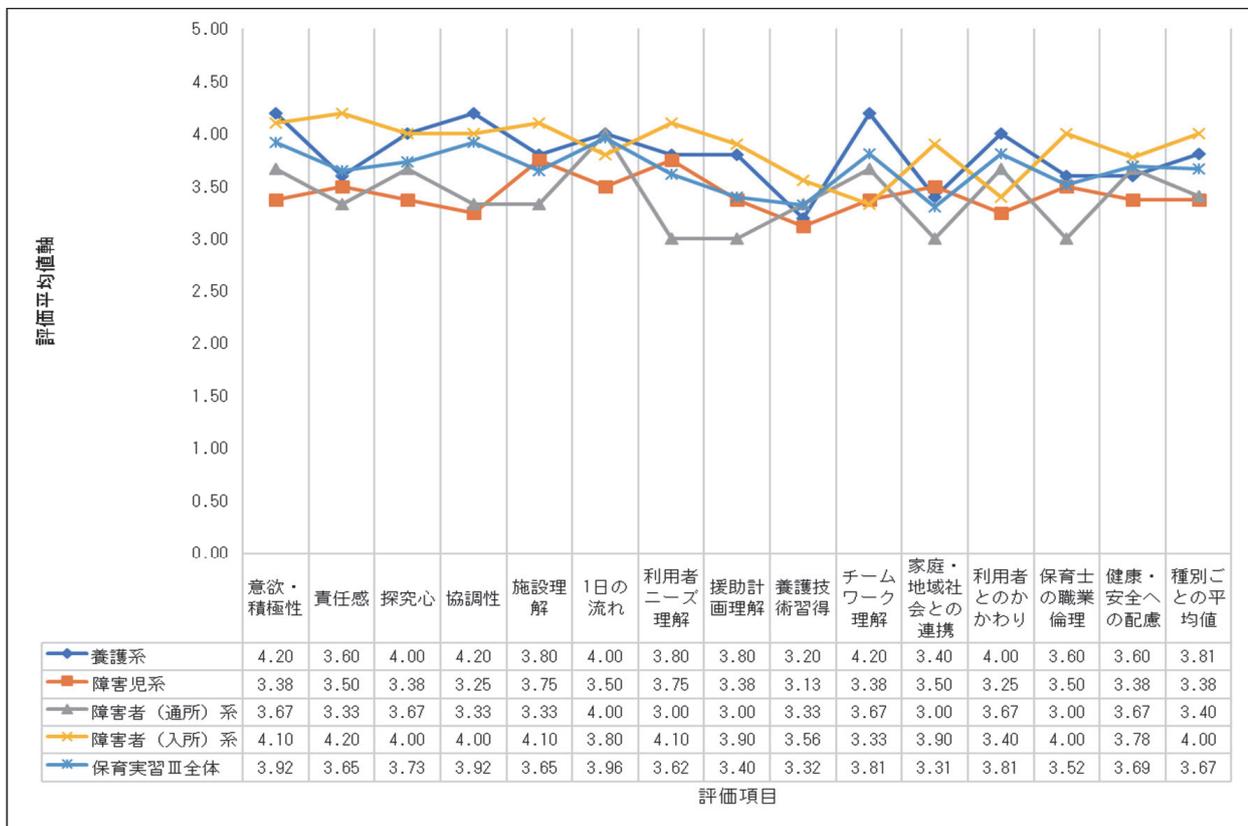


図5：単独年度内の実習先種別ごとの項目別評価平均値の比較（2019年度）

高くなった（2019年度だけで見ると平均値では最も低い項目になっているが）。「援助計画理解」「養護技術の習得」「保育士の職業倫理」に関しては、2018年度、2019年度ともに平均値が低い。

全般的に見て2018年度、2019年度とでは傾向が異なる。2019年度は、「協調性」「施設理解」「チームワーク理解」「1日の流れの理解」といった項目でどの種別でも高い評価が出ていることからわかるように、対利用者（子ども）といった個別のかかわりだけでなく、施設の中の職員やチームとしての職員間の連携といった部分を意識して学生が実習できていたのではないだろうか。また、「意欲・積極性」の項目においては、養護系と障害者（入所）系施設で平均値が最も高くなっていた。これらのことから、2018年度の学生と比べ前向きに実習に取り組んだ（と相手に思ってもらえる態度）の学生が多くいたのではないだろうか。これは、保育実習Ⅱ、Ⅲの選択においても、

消極的理由で選択しないことを伝え、実習指導の授業内においても自分から学びに行くことを伝えていたことが学生にも浸透したと考えられる。こうしたことから、実習指導を行う教員側が学生の傾向を踏まえたうえで、何のために実習に行くのか、何を求められているのかをしっかりと意識し、学生に伝えていくことが重要であると考えられる。

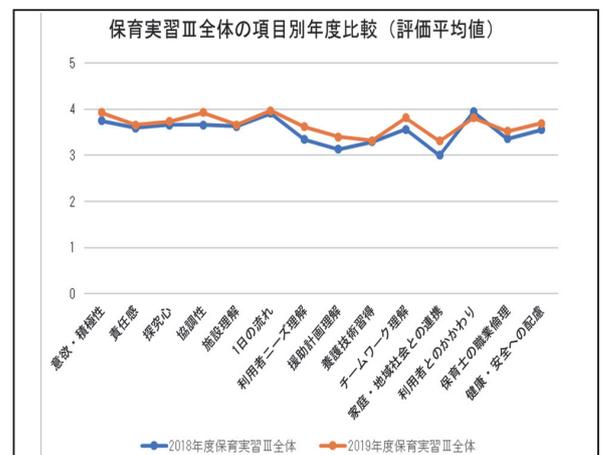
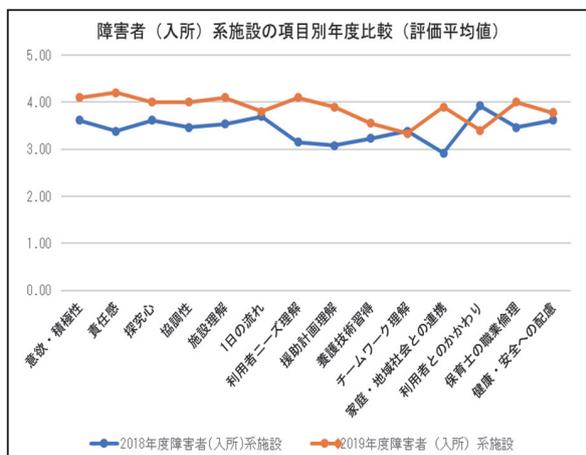
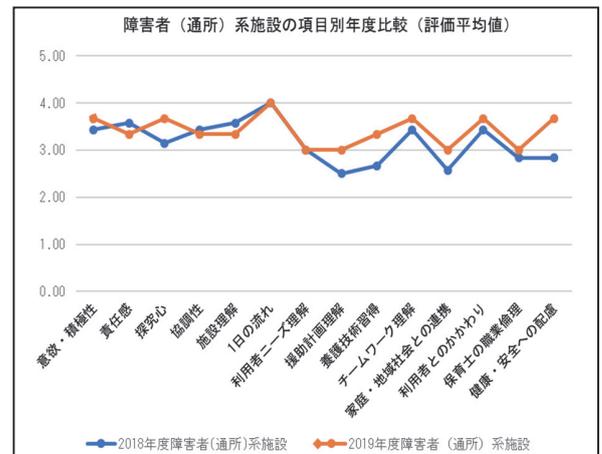
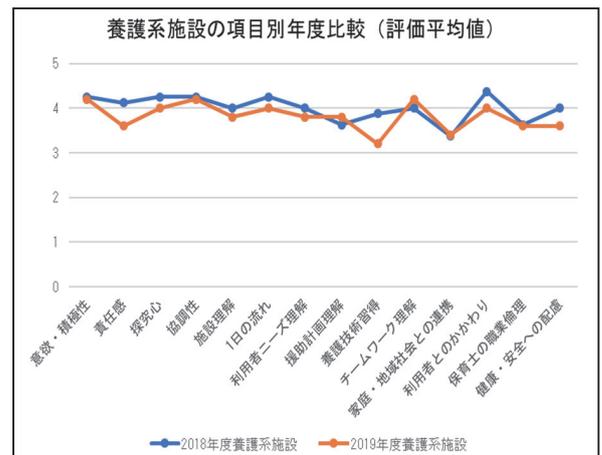
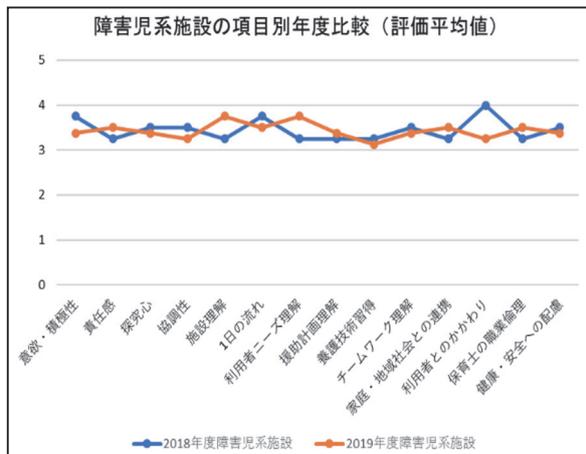


図6：同一実習先種別における項目別評価平均値の年度比較

(3) 保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの比較

保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲの評価項目別評価平均値を比較し、施設だけの傾向なのか、保育所でもそうなのか、A保育者養成校全体としての特徴なのかをみていきたい。

実習評価は、「態度」と「知識・技能」に大きく項目がわかれている。「知識・技能」に関しては、保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲのそれぞれの特性に合わせて項目が異なっているため、保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの実習先評価を比較することは難しい。しかしながら、「態度」に関しては、保育実習Ⅱも保育実習Ⅲも同じ項目で評価がつけられているため比較が可能である。そこで、本研究では、実

習先評価の「態度」に関する項目について、保育実習Ⅱを選択した学生と保育実習Ⅲを選択した学生で傾向が異なるのかを比較検討していくこととした。

比較の結果は、図7と図8の通りであるが、2018年度、2019年度ともに保育実習Ⅱでも保育実習Ⅲを選択した学生も傾向はほぼ同じであることがわかる。多少の違いがあるとするならば、2018年度、2019年度ともに保育実習Ⅲを選択した学生の平均値が「意欲・積極性」の項目で高いくらいである。このことから、「態度」に関する項目については、保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲでも変わらず、A保育者養成校の学生全般の傾向と言える。

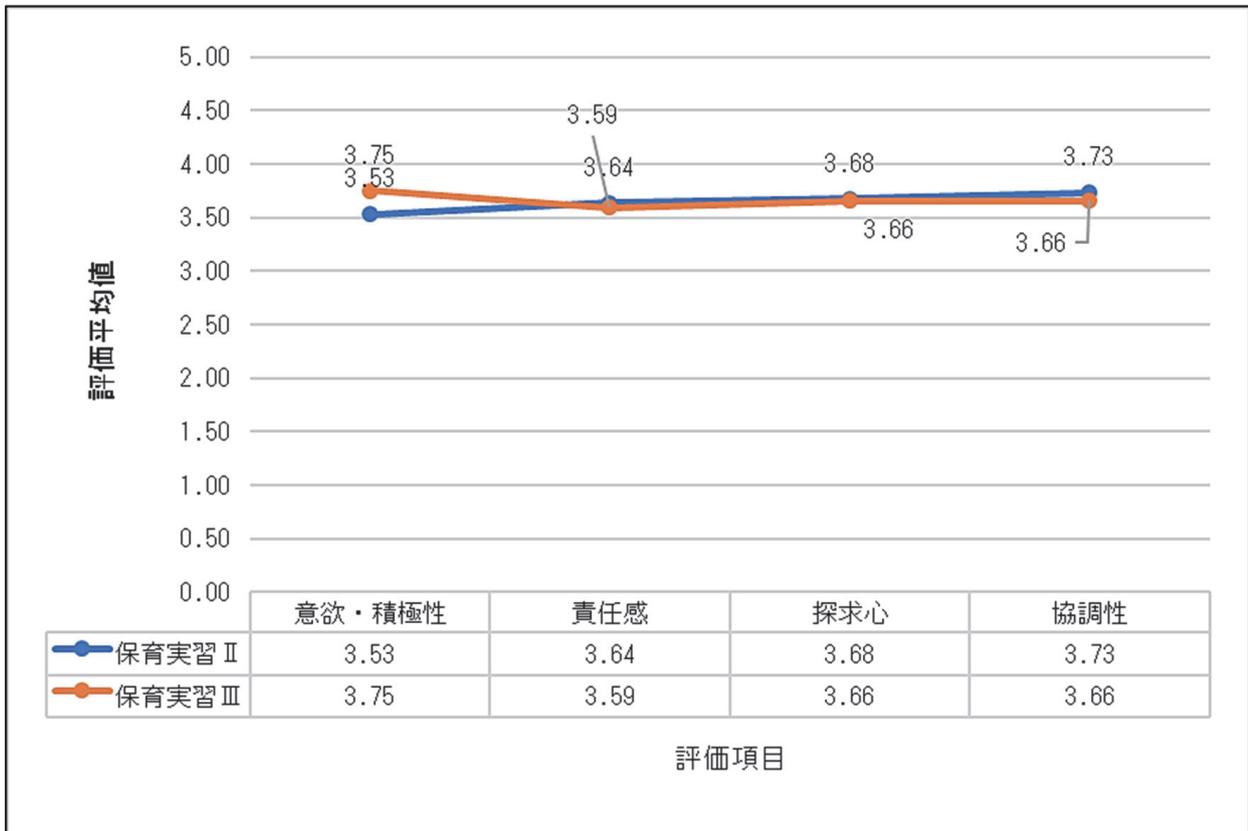


図7：2018年度保育実習Ⅱ・Ⅲの実習態度に関する評価比較

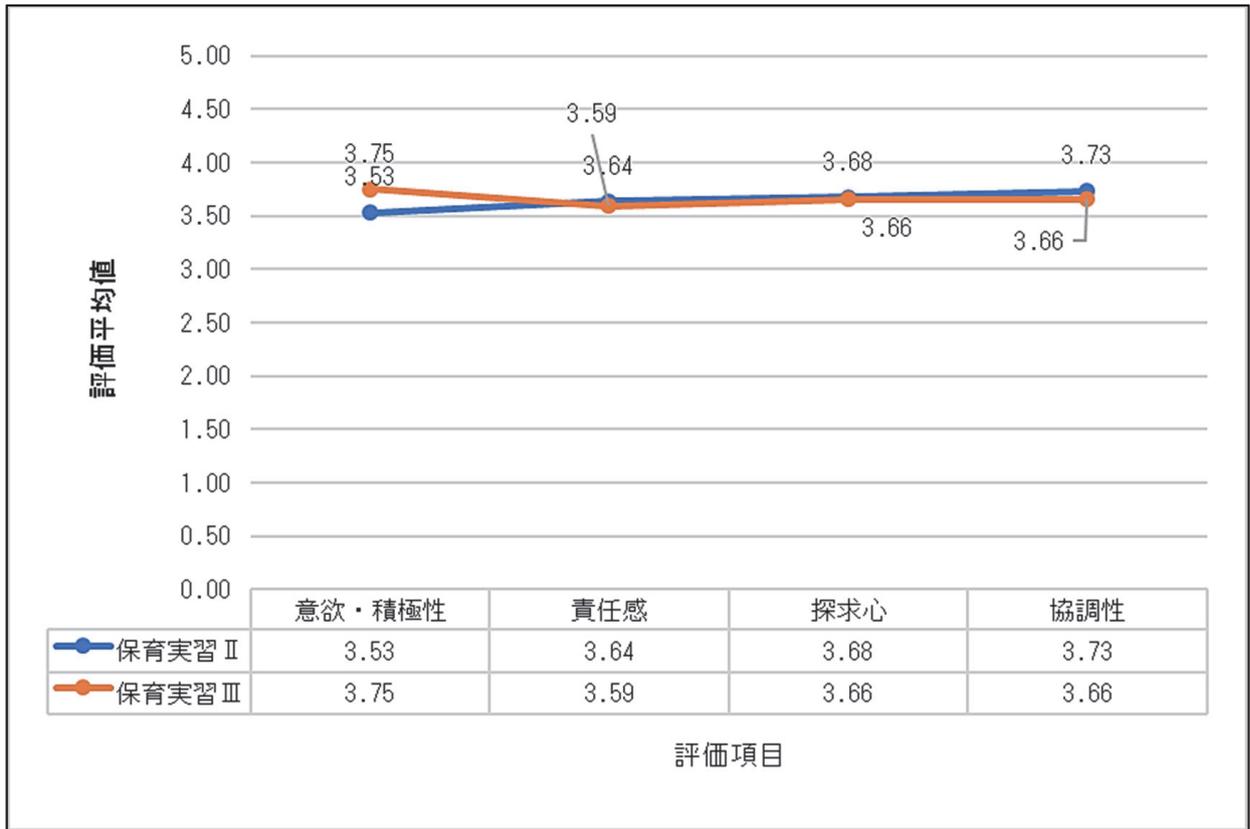


図8：2019年度保育実習Ⅱ・Ⅲの実習態度に関する評価比較

5. 学生の傾向を踏まえた実習指導の在り方の検討

4の(3)で実習「態度」に関する保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの比較を行ったが、「意欲・積極性」「責任感」「探求心」「協調性」は、実習生としての基本的態度として持っていないわけではないものである。基本に立ち返るようではあるが、実習指導においても、学生に実習生として何が求められているのかをしっかりと伝え、実習の意味、目的を踏まえて指導していくことが必要である。

A保育者養成校では、学生向けに「実習ガイドブック」を作成し、心得から事務手続き上のことまでわかりやすく伝えている。また、各実習指導の授業概要・授業計画(シラバス)も作成し、計画的に授業が展開されている。その中では、実習への向き合い方、実習先への理解、子ども・利用者への理解、日誌等の書き方等多岐にわたる内容が盛り込まれている。

今回の研究結果からA保育者養成校の学生が、実習先からどう見られているのか、強みと弱みが見えてきた。そこを踏まえた指導方法が課題とな

る。また、こうした指導は実習指導の授業だけでなく、訪問指導時の教員の指導内容・方法等も含めて検討が必要である。今後は、教員向けの訪問指導マニュアル等も作成し、意識の共有が必要になると考えられる。

おわりに

本研究で見えてきた学生の特性・傾向は、A保育者養成校だけの学生の特徴なのか、他大学でも同様の傾向がみられるのか検討していくことが今後の課題である。例えば、実習態度に関しては、今回の調査結果では、平均3.7であった。これは果たして他大学と比較した場合に高いのか、低いのか。実習先の園・施設はA保育者養成校以外の学校の実習生も受け入れている。そうした中で、A保育者養成校の学生の位置づけはどのくらいなのか、そうした相対的な位置関係の把握も必要なのではないかと考える。A保育者養成校の学生だけを見ると強みと思えることも他大学の学生と比較

することで異なる結果も見えてくるかもしれない。それによっては、A保育者養成校の学生への指導内容だけでなく、実習先の園・施設への学生の特性・傾向の伝え方も異なってくる。実習指導というのは、学内だけの指導にとどまらず、実習先の園・施設での指導も重要になる。そうした意味で、実習先の園・施設といかに連携し、協力して指導に当たるかが、学生にとって、実習への満足度や充実度にもつながる可能性がある。その初めの一歩として、本研究で示された学生の特性・傾向の把握は、実習指導の上でも重要になると考えられる。

※本論は、日本保育学会第73回大会におけるポスター発表に加筆したものである。

引用文献

- 1) 奥恵、浅香勉、八田清果、音田忠男 (2020) 「保育実習生の課題を踏まえた実習 指導のあり方」, 『小池学園研究紀要』 第18号, p15-24.

参考文献

- 1 : 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2018) 『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2「協働」する保育士養成』, 中央法規出版

八田清果 (埼玉東萌短期大学准教授)

奥 恵 (埼玉東萌短期大学専任講師)

浅香 勉 (埼玉東萌短期大学教授)

音田忠男 (埼玉東萌短期大学専任講師)